大人が絵本を

第64回 絵本の日アワード 2019

司書・読書アドバイザー　安藤　宣子※
小児歯科医師　濱野　良彦※※
※ 絵本と図鑑の親子ライブラリー　ビブリオキッズ（福岡市）
※※ 医療法人元気が湧く　理事ファウンダー

絵本のチカラを感じる日

11月30日は、絵本の日です。絵本は、子どもにとっては楽しい遊びであり、大人には癒しの芸術鑑賞です。それが、子どもと大人を介したとき、気持ちの共有とともに、コミュニケーションを深める時間が生まれ、予期もしない驚くほどのチカラを放つ魔法のツールとなるのです。それだけではありません。その奥深くでは、「子どもが、言葉を学び、感性を磨き、表現力を高め、想像力を豊かなものにする」ほどの多種多様な能力を刺激して、育んでいるのです[1)]。

自身の子ども時代に、そうやって絵本を楽しんで育った大人が、自分の子どもたちと絵本でコミュニケーションを深める時期を通過し、今度は大人自身のために絵本を開いたとき、その時々の置かれている状況に応じて「生きていくうえで一番大事なものは何かを示している」とは、柳田邦男氏の発信する「絵本は人生で三度読むべきもの」の言葉です。柳田氏が訴えるところの「人生の深い意味を読み取ることができる」もの、それが絵本です[2)]。絵本は、子どものためのものです。同時に、絵本は大人のためのものなのです。

ひと言では説明のつかない「絵本」のチカラを、社会にもっともっと広げるために制定されたのが、「絵本の日」です。それでは、ビブリオキッズに寄せられた実際のエピソードをお借りして、絵本のチカラをご紹介しましょう。

『ふしぎな おきゃく』とふしぎなチカラ

「Yちゃん、クラスの子と比べると遅れちゅう気がするき、一度病院行ったらどうやろ」。保育園に迎えに行くなり、日頃から信頼している担任の保育士に、こう言われた。「ええ、そうなが。先生がそう言うがやったら、明日早速、連れて行くわ」。必死で冷静を装い、こう応えた私だが、胸中はショックで激しく動揺し、立っているのがやっとだった。

次の日、市内でも評判の小児科病院に娘を連れて行った。受付をすませ、待合室に座った途端、娘が持参していたカバンから一冊の絵本を取り出すと、読み始めたのだ。「あんた、その本、持って来ちょったがかえ」。私が思わずこう言うと、娘は笑ってこう応えた。「うん。病院いっつも待たないかんろう。けんど、本読みよったら退屈せんきね」と――。

元々体が弱く、度々病院へ通っていた娘…。無邪気に笑っているのが、よけい辛く、私はなんでもない振りをし、「そりゃそうや。あんた、本当にその本好きやね。まあ読みよりや」と、笑って応えた。

問診の他、脳波まで撮った診断の結果、医師は笑顔で「Yちゃん、頭にも全く異常なしです。むしろ賢い。私から保母さんにそう伝えましょう」と言ってくれた――。私が医師からそれを聞いている間も、娘は本に熱中していたようで、嬉しさで涙が出そうだった私が、「さあ、帰るぞね」と言う声に、慌てて追って来た。

あれから早三十年余り――。当時、確か年少さんだった娘は、三年前に結婚、家を出た。

実は遠いあの日、家に帰るなり、「本、病院に忘れてきた」と言いだした娘。私が「すぐ取りに行くぞね」と言うと、娘はいつもの笑顔で、こう応えたの

手にするときは！
in FUKUOKA エピソード大賞

企画　濱野　良彦
構成　木須　信生※※※
※※※ 絵本と図鑑の親子ライブラリー　ビブリオキッズ（福岡市）

だ。「ううん、本、病院に置いちょく。ドキドキして待ちゆう時、あの本読んだら気分がホッとするき、皆に読んでもらおう」と――。私は隠れて、なぜか号泣した。

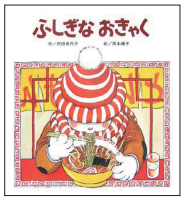
その本『ふしぎなおきゃく』は、今もあの病院にあるのだろうか……。時折、ふと思う。

エピソード投稿者……棚橋すみえ様（高知県）

子どもと大人の深い関係が力を引き出す

このエピソードは、「絵本の日」アワード2019 in FUKUOKAエピソード大賞グランプリに輝いた作品です。どんな説明をするよりも、「絵本のチカラ」が胸にズシンと響いてきます。絵本に備わっている予測もできないチカラが、棚橋様親子の心の支えとなったことを伺い計ることができるのです。

『ふしぎなおきゃく』
肥田美代子 作
岡本颯子 絵
（ひさかたチャイルド）
2006年新装改訂版



見方を変えると、この時、Ｙちゃんのカバンに入っていた絵本が、全く別のお話であったならば、棚橋様親子の大切な絵本は、『ふしぎなおきゃく』ではなかったでしょう。年少さんという年齢の、検査を促された時期にＹちゃんのお気に入りだった一冊が、病院受診のお供となって、Ｙちゃんと、母親である棚橋様の揺れ動く心に寄り添う支柱となったことで、『ふしぎなおきゃく』は光輝く宝物となったのです。

何よりも、３、４歳という年齢で、病院の待ち時間に読むための絵本を持参するＹちゃんの姿から、棚橋様の子育ての姿が垣間見えてきます。３～４年間の育児の過程で、家族の間にいつも絵本があったからこそ、ちょっとしたときでも絵本を楽しむお子様に成長したのだと見受けることができます。そのうえ、私たち“医療法人元気が湧く”が発信する「臨床の中に活かす絵本」の発想を備えた年少児さんに、大人が学ばされるところです。そのような素地があったが故に、絵本の大きなチカラが降臨したのだと思います。棚橋家に培われた「子どもの読書と大人との深い関係」[3]が、絵本の大きなチカラを引き出したと解釈できるのです。

心を動かし、社会を豊かにする「絵本の日」

昨年11月24日、医療法人元気が湧くが主催した「絵本の日」記念イベントで、「絵本の日」アワード2019 in FUKUOKA エピソード大賞授賞式が執り行われました。授賞作品最後の発表で、グランプリ作品が朗読されると、会場内はほっこりした空気に包まれました。棚橋様の物語を出席者全員が追体験して、共感したのです。それは、誰しもが絵本のチカラを心と脳で感じた瞬間です。

「絵本の日」アワード
2019 in FUKUOKA
エピソード大賞授賞式

2012年に誕生した「絵本の日」が５年目の節目となる2017年、さらに躍進すべく創設したのが、「絵本の日」アワードin FUKUOKA エピソード大賞です。

３回目となった昨年の応募総数は370作品に上り、前年の３倍を超えるエピソードが寄せられまし

た。370通りの絵本のチカラが集まったのです。その中から厳選なる審査を重ねた結果、グランプリに輝いたのが、棚橋様の『ふしぎなおきゃく』なのです。

光が当てられた5作品に人々は、心を温められ、また感動の涙に誘われました。授賞作品だけでなく、応募された370のエピソードから、絵本材とそれを読む人それぞれに異なる絵本のチカラが生まれることを再確認しました。絵本から生まれた想い出のエピソードは、人々の心を動かし、感動を生み、社会を豊かにすることが揺るぎない確信となったのです。

モノでも、形でもない神秘のチカラ

絵本の日アワード2019エピソード大賞グランプリに輝いた絵本『ふしぎなおきゃく』がこの世に出たのは38年前の1981年のことで、初出はチャイルド本社の月刊雑誌絵本「おはなしメルヘン」です。チャイルド本社といえば、月刊保育絵本を幼稚園・保育園へ直販する幼児教育専門出版社ですから、『ふしぎなおきゃく』は、書店では入手できず、特定の人しか読むことができなかった絵本です。

形態はペーパーバックなので、薄くて軽く、持ち運びに便利という点で、小さなYちゃんの負担にならなかったことも、もしかしたら『ふしぎなおきゃく』が棚橋様親子の宝物になった一因かもしれません。

棚橋様親子の支えとなった現物の『ふしぎなおきゃく』は、受診した病院に残しましたので、手元には存在しません。それと同一のソフトカバーは、納本制度をもつ国立国会図書館以外で目にすることは、ほぼありません。それでも、『ふしぎなおきゃく』は、棚橋様の心に強く残り、今でも“ふしぎなチカラ”を放っているのです。これが、「絵本のチカラ」なのです。

ふしぎなルーツをたどる

月刊絵本とは売り切り型で、売り切れると入手困難となる類です。しかし、出版元のチャイルド本社は、先の「おはなしメルヘン」で刊行された月刊絵本のうち、良書を「おはなしチャイルドリクエストシリーズ」として、同じ安価なソフトカバーで蘇らせました。『ふしぎなおきゃく』は1991年、取り寄せ購入の形式で、再びお目見えしたのです。

さらには、この「リクエストシリーズ」の名作を別の出版社が単行本化して復刊させたのです。『ふしぎなおきゃく』は2006年、新たに、ひさかたチャイルドよりハードカバーで新装改訂され、今度は書店ルートに載せられて出版されました[4)]。2つの出版社が関わっている『ふしぎなおきゃく』は、2020年初頭の現在でもソフトカバーもハードカバーも入手することができる、絵本そのものに物語をもつ不思議な作品です。

『ふしぎなおきゃく』を復刊させた“ひさかたチャイルド”は、そもそもの出版社である“チャイルド本社”が市販ルートへの新たな進出に際して、1981年に市販ルート専門の出版社として創業、今や『どうぞのいす』や「ころわん」シリーズで定評のある出版社です[4)]。その創業年に、ルーツとなる親会社が発行した月刊絵本を、四半世紀の時を経て、新生させた『ふしぎなおきゃく』は、両出版社にとっても、きっと思い入れの強い作品でしょう。そのような歴史ある絵本に、再び煌々と光が当てられたというわけです。偶然か必然か、『ふしぎなおきゃく』には、不思議な作用が働いているようです。

ふしぎの作者は、子どもの読書離れにストップをかけた童話作家！

棚橋様親子にチカラを放った『ふしぎなおきゃく』の作者をご紹介しましょう。肥田美代子氏の名前を目にして、関西地区の方はピンとされていると思いますが、元国会議員です。本業は童話作家で、かの花岡大学を師匠に、1978年『先生しごいたる』(偕成社)でデビューしました。もっと遡ると、大阪薬科大学卒業後、歯科医療器会社に入社、その後、

ビブリオベイビー Bibli Baby

連絡先　福岡市南区大橋 3-2-1 2F
絵本と図鑑の親子ライブラリー　ビブリオキッズ
TEL 092-557-3272　URL http://bibliokids.jp

E-mail
安藤：bibliokids.baby1@gmail.com
濱野：hamano@genkigawaku.com
木須：nobuokisu@gmail.com

薬剤師として薬局を営みながら創作活動を行い、デビューに至った経歴をもつ作家さんなのです[5]。

肥田氏は、1989年の参議院議員初当選から2005年に政界を引退するまでの15年間の国会議員時代に、学校図書館・公共図書館の現場に従事する私たち図書館員の土壌を開拓し、国民の読書活動の意識改革に取り組んだ開拓者なのです。

1989年とは、子どもの読書離れが深刻な時期で、問題解決のため先頭に立って舵を切り、「子どもの読書活動推進法」「文字・活字文化振興法」の成立をけん引した人物が、童話作家の肥田美代子氏です。議員生活15年間の理念を、「言葉の輝く国づくり」と掲げて精力的に活動し、読書に関わる法律の制定以外にも、「国際子ども図書館」の設立、読書活動を後押しする「子ども夢基金」の創設、「2000年子ども読書年」国会決議、「2010年国民読書年」国会決議の採択に中心的な役割を果たしました[6]。その結果、小中学生を読書の習慣化へ誘い、読書量の上昇へと導いたのです。

読書に関わる環境が徐々に整い始めたとき、肥田氏は議員となった当時を振り返って、「読書環境の整備を提案しても、政界には読書に関する問題意識は皆無に等しく、軽くあしらわれ落ち込むこともあった」と明かしています[6]。政治の世界で紆余曲折しながらも、実に10年をかけて可決成立させた「子どもの読書活動推進法」の理念に、「読書活動は、子どもが言葉を学び、感性を磨き、表現力を高め、想像力を豊かなものにし、人生をより深く生きる力を身につけるうえで欠くことのできないものである」と書き込んだのは、『ふしぎなおきゃく』の作者である肥田美代子氏当人なのです[1]。

肥田氏は、議員を引退した後も、自らが関わった２つの法律の具現化のために、「財団法人 文字・活字文化推進機構」を設立し、2007年10月、理事長に就任して、読書文化や図書館の振興に力を尽くしながら創作活動に勤しむ「本と生きる」作家です[6,7]。

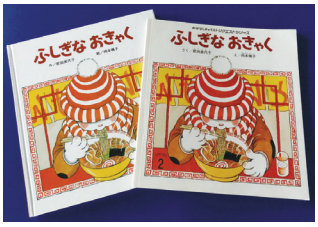
絵本の幸せをすべての人に！

「絵本の日」アワード2019エピソード大賞グランプリ受賞作は、私たちに感動を巻き起こし、絵本のチカラを見せつけてくれただけでなく、一冊の絵本が羽ばたくまでの歴史と、そんな絵本を生んだ作者の、読書に懸ける思いの迫力まで知ることができました。

そして医療従事者には、もっとも大切な「言葉の力」を考える題材となったことでしょう。

絵本作家という「人の力」があって絵本が生まれ、人と人との間に絵本を介することで、その力は無限に広がり、作家を離れて、絵本と出会った人それぞれの物語となって歩き出すのです。絵本のある世界に生まれた幸福を感じずにはいられません。そのような幸福な環境を与えられているのですから、多くの子どもと大人に、同じ幸せを届けてあげる活動に務める使命が私たちにはあるのです。

『ふしぎなおきゃく』
左 2006年新装改訂版
（ひさかたチャイルド）
右「おはなしチャイルド リクエストシリーズ」
（チャイルド本社）
2007年第3版



文献
1）文部科学省：子どもの読書活動推進ホームページ，文部科学省HP http://www.mext.go.jp（登録：平成21年以前）
2）柳田邦男：大人こそ絵本を（In 河合隼雄，松居　直，柳田邦男：絵本の力）岩波書店，東京，pp.85-87, 2001.
3）全国学校図書館協議会：第65回学校読書調査，毎日新聞社，2019.10.27, pp.12-13.
4）ひさかたチャイルド：ひさかたチャイルドホームページ，ひさかたチャイルドHP　https://www.hisakata.co.jp
5）肥田美代子：教育のペースは言語力 ことば輝く国を目指して，関塾経営者会報ひらく（123），関塾HP http://www.kanjuku-hiraku.com
6）肥田美代子：言葉の輝く国へ，Rimse（理数教育研究所）ブックレット（2），p.1-10, 2012.
7）肥田美代子：「本」と生きる（ポプラ新書），ポプラ社，東京，204p, 2014.